

栗福合戦

今から600年ほど前のこと。そのころ奥山地域一帯は、太田の発坂城主、栗栖権之頭の支配下にあり、その過酷な収奪に苦しんでいた。

古来奥山地域は寒冷の地で、農作物は天候に左右されやすい。しかし不作だからといっても年貢が軽減されることはなかった。そのために冷害の年には、病死者や飢死者が続出した。

百姓たちは、たびたび集まって相談した。

「このまま栗栖の支配が続けば、我々はみんな飢え死にってしまう。村も全滅するぞ」

「隣の国、石見今市の福屋木工丞殿は善政の人と聞く。ぜひ福屋殿にこの地の主となってもらおうではないか」

「そうじゃ、とにかく一度福屋様のところをお願いに行ってみよう」

早速に、代表の若者三人が選ばれた。



三人は、闇夜の日を選び、決死の覚悟で村を出発した。栗栖の武士に見つからないようにわざわざ遠回りして国境を越え、石見今市をめざした。街道を避け、藪の中を這うようにして進んだ三人は、着ているものがボロボロになり、体中のあちこちは傷だらけになり、昼前ようやく今市に着いた。

汚れた衣服をまとい、うろうろしていた三人は、まもなく福屋の役人に取り囲まれた。

「怪しい奴らめ。お前たちはいったい何者じゃ。」

百姓たちは、番所に引き立てられた。

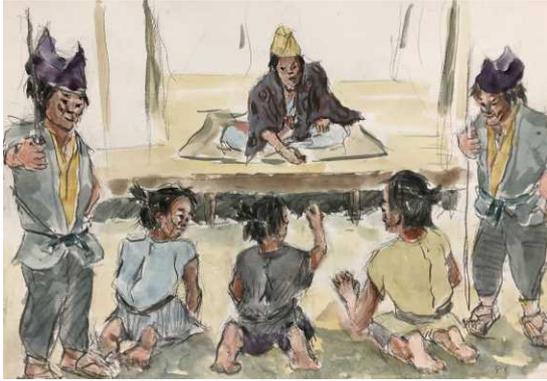
白洲に座らされてしばらく待っていると、奥から身分の高そうな侍が出てきた。

「面（おもて）を上げえ。お前たちはいったい何者じゃ？」

「私たちは隣の安芸国奥山筋の百姓です。ぜひ話を聞いてほしいことがあります」

「何？安芸国の奥山というと、栗栖権之頭殿の領分だな。その百姓がまた何をしに来たのじゃ？」

百姓たちは、これまでの栗栖の圧政のこと、自分たちの貧しい暮らしぶりのこと、ぜひこ



と言うなり、ゆるりと奥に引っ込んだ。

一方村では、

「今市に出かけた三人の若者たちがなかなか帰ってこんが、いったいどうしたものか」

「見つかって殺されたのではあるまいか」

「もし見つかったのなら、我々もこのままではすむまい」

などとやきもきして待っていたところに、三人が元気に帰ってきたので大喜びした。しかも、福屋殿に話を聞いてもらえたということで、一筋の光が見えてきた。

「よし、これからは皆な心一つにして戦おう。福屋様に付いたことは絶対に秘密じゃ」

「もし秘密が漏れたら、全員殺されるかもしれぬ。福屋様にいったんお願いした以上、もう後には引けん。我らの戦いはすでに始まっているのだ」

やがて、百姓の姿に身を変えた福屋の武士たちが、度々奥山に出入りするようになり、百姓たちと密かに連絡を取り合った。百姓たちも、福屋側に付いたことが絶対に栗栖側にばれないように、男も女も、年よりも子供も一切口外しなかった。村は表向き平静さを保っていた。こうして秘密は守られ、やがて栗栖と対峙する日を待った。



ついに、その日がやって来た。

秋口の年貢を払う日のことである。

栗栖の武士が数人馬に乗り、年貢を受け取りに村に乗り込んできた。

栗栖の武士たちは、村に入った瞬間から、いつもと村のようすが違うことを肌で感じていた。何かがおかしい。この静けさは何だ。

武士たちは名主の家に着いた。見ると、そこに全ての村人が集まっている。男も年寄りも女も子供もがちりと体を寄せ合って、武士を睨み付けるようにして待っている。

しかも、いつもなら年貢の米俵が積み上げられているのに、その米俵がまったく見当たらず

れからは、福屋氏に奥山一帯の支配をお願いしたいことなどを必死に訴えた。

侍は最後まで聞いていたが、やがて

「その方たちのいうことは、よく分かりました。その通りに殿にお伝えしよう。しかし、これは国を越えた大事じゃ、そう簡単にはいかないことと思え。とりあえず、今宵はゆっくりと休むがよい。明日、国境まで送らせよう。」

ない。

「これは、どういうことじゃ？お前たちはここでいったい何をしているのだ？」



武士たちは百姓に詰め寄った。

百姓の中から代表が一人静かに前に出ると、毅然とした口調で言った。

「これは、栗栖の御家来衆様。遠路はるばるご苦労さまでございました。しかし、誠に申しあげにくいことですが、私どもはこれから栗栖様には年貢を払いませぬ。私たちは、これから石見の福屋様に年貢を払うことに決めました。どうぞお引き取り下さい」

武士たちは、腰を抜かさばかりに驚いた。

「なっ何だと。いきなり何をほざく。貴様等、全員、この場でたたっ切るぞ」

と大声で威嚇したが、百姓たちは男も女も、子供も老人も一歩も引かない。名主を取り囲むようにして、武士たちを睨み返した。その決死の覚悟が武士たちにひしひしと伝わってきた。その迫力に武士たちは、刀を抜くことができなかった。しかも、よく見ると、百姓たちの間に、おそらく福屋側の武士なのであろう、武装した者が刀や槍を手に何人も隠れている。もし一瞬でも刀を抜けば、たちまち切られそうな殺気が漂っている。



「お前たち、こんなことをして、どんなことになるか分かっているだろうな。覚えておれ」と、栗栖の武士たちは捨て台詞を残し、急ぎ走り去って行った。

その後ろから、百姓たちの、「やったぞー」「ついに栗栖に追い払ったぞ」と喜び合う声が聞こえてきた。

この知らせを聞いた栗栖権之頭は、激怒した。

「奥山の地を福屋などに奪われてなるものか」と、すぐに自らが軍を率いて奥山に出陣してきた。



こうして、栗栖と福屋の戦争が、奥山の地を舞台に繰り広げられた。それは8年間にもわたって続く。この戦いを「栗福合戦」と呼ぶ。

戦いは一進一退だった。そして正長2年、1429年。栗栖権之頭と福屋木工丞の両軍は、ついに雄鹿原で最後の戦いに臨んだ。



その時、福屋は、真夜中に牛の角に松明を括り付けて敵陣めがけて走らせるという奇策を用いて勝利した。栗栖権之頭主従は雄鹿原物見ヶ丘で戦死し、その場に葬られた。

この戦いの後、しばらくして奥山一帯では、凶作が続いたり、疫病が流行したりした。

ちょうどそのころ、一人の百姓が、城岩方面から、白馬に乗った栗栖権之頭の亡霊が空中を飛んで北に向かったのを見たという噂が流れた。凶作や疫病は、もしや自分たちが栗栖権之頭から福屋木工丞に寝返った祟りではないかと恐れた。そこで、物見ヶ丘に祠を建てて「殿宮大明神」（現在は、亀山八幡神社に合祀）として、栗栖権之頭の霊を祀ったところ、それ以後は不作や疫病は無くなったという。



イラスト：佐々木和正